

# 旅行案内書の成立と展開

山本光正

Formation and Development of Travel Guidebooks

YAMAMOTO Mitsumasa

はじめに

① 研究史及び旅行案内書について

② 道中記

③ 鉄道沿線案内

おわりに

## 【論文要旨】

旅行史研究は多様化しているが、基本史料である旅行案内書の総合的研究はこれからの分野のようである。本稿では旅行案内書を分類して通史的に捉え、その成立と変容について述べた。なお本稿では近世から明治中期までの徒歩による移動を旅、交通機関による移動を旅行とし、両者を合わせて旅行とした。

旅行案内書は①旅程に関する案内②地域に関する案内③テーマ別案内④ピンポイント案内に分類することができるが、ここでは①の案内を取上げた。旅程に関する案内とは街道や鉄道沿線の案内のことで、近世の案内は道中記と呼ばれた。

日本において道中記が出版されるようになったのは明暦頃からで、延宝期には形式も完成し定着した。一七〇〇年代には各種道中記が出版され、絵地図のみの道中記も刊行されている。しかし識字率や価格の面から広く普及したとは考えられない。道中記の普及は浪花講等旅宿組合が道中記を出版するようになってからのことであろう。

近代に至り明治三二年東海道線が開通すると道中記は姿を消し、鉄道沿線案内が民

間の出版社から明治二〇年代後半より刊行されるようになるが、大正期に入ると激減している。

国鉄は明治三八年に沿線案内を刊行し、同四二年以降大正末年に至るまでは毎年沿線案内を刊行。昭和四年からは名著といえる『日本案内記』全八冊を刊行している。大正期に入ると民間からの沿線案内が減少するのは旅行の多様化によるものである。近世の旅の多くは伊勢参宮などの社寺参詣を目的としたが、実際には道中を含めて旅そのものが楽しみを享受する場であった。しかし近代に入ると道中は消滅し、旅行は点から点への移動となり、鉄道・バス等の発達により旅行の目的は多様化し、地域別・テーマ別の案内を多数刊行されるようになっていく。

以上のような背景により、旅程に関する案内はその姿を消していくのである。

【キーワード】 道中記、鉄道沿線案内書、旅、鉄道、浪花講

## はじめに

近世及び近代旅行史の研究については現在多くの研究成果が発表されている。本格的な旅行史の研究は新城常三の『社寺参詣の社会経済史的研究』<sup>(1)</sup>にはじまるが、その後旅日記をもとに旅の実態や旅のパターン化をはじめとする研究成果が発表されるようになり、かつて筆者も旅日記をもとに伊勢参宮がパターン化していたことを明らかにしたことがある。<sup>(2)</sup>

その後旅行史研究は盛んになり研究内容も多様化し、名所や旅行者の知識・視点の分析、特に近代では観光という立場からの研究成果も蓄積されつつある。ところで、旅行史研究特に近世の旅については在野の人々に負うところが大きい。彼らが解説した旅日記は相当数に上り、旅行史研究に利用されている。こうした人々の中に高山茂・勝子夫妻がいる。高山茂氏は退職後、夫妻で『江戸時代庶民の旅資料』全一冊をワープロ打ちで自費出版。その後旅日記の翻刻・写真版・解説等を中心とした『道中記学習ノート』の刊行を開始した。一冊九〇頁前後であるが、平成九年には全百冊に達している。

こうした旅行史研究を象徴するかのよう<sup>(3)</sup>に出版されたのが今井金吾編『道中記集成』全四四巻別巻三巻である。

旅行案内書は既に近世以前から存在していたのではないかと考えているが、出版されるようになったのは近世に入ってからのものであり、旅が盛んになるに従い、近世には多種多様な旅行案内書が板行されるようになった。近代に至り鉄道が導入されると、旅行内容の多様化により案内書もまた多様化していった。

旅行案内書の研究、特に近代については近年盛んに研究が行われるようになったようだが、旅行案内書の基礎的研究ともいえるべき近世から近

代に至る旅行案内書の出版状況及び近世から近代にかけての案内書の内容等についてはあまり着手されていないようである。本稿においては以上のような観点から旅行案内書について述べていくことにする。

尚、本稿においては徒歩による移動を旅、鉄道等の交通機関による移動を旅行としたが、旅・旅行と区別した主な理由は、一つには移動方法の違いを示すため、一つは近世と近代を区分するためであり、両者を総称する場合は、旅行と表記する。尤も両者は厳密に区分できるものではなく、近代に入ってから鉄道が発達するまでは旅の時代である。鉄道発達以降旧道を歩くことが行われるようになるが、こうした行為は旧道旅ではなく旧道旅行・徒歩旅行と呼ばれている。本稿においてもこうした移動を概ね旅行とするが、それはたとえ歩いて移動しても、鉄道発達以前の旅とは本質的には異なるものであるからである。

## ① 研究史及び旅行案内書について

### (一) 研究史

先ず近世の旅行案内書に関する研究からみていくことにしよう。

近世の旅行案内書については、古くは三田村鳶魚の業績がある。鳶魚は昭和一三年から一四年にかけて『交通文化』三・五・六号に『道中記が与える問題』<sup>(4)</sup>を連載している。本論文は中央公論刊の『三田村鳶魚全集』一五巻に「道中記が与える問題」として収録されているので、ここではこれに依ることとする。

鳶魚は『諸国安見回文之図』・『東海道袖の玉鐙』・『東海道巡覧記』・『岐蘇路安見絵図』・『東海道旅人訓』を取上げ、書誌的分析及びこれら案内書を通して近世の旅について述べている。各種案内書からみた旅についての問題点については述べているものの、旅行案内書そのものについて

の問題点について述べているわけではない。

鳶魚は旅行案内書を通して旅をみようとしたものであり、案内書そのものを体系的に扱えようとしたものではなかった。

大島延次郎は「江戸時代における道中記」<sup>(5)</sup>において、「道中記」という概念はかなり曖昧で、その範囲を規定することは至難」とし、道中記を列挙し検討を行っている。列挙されたものは道中記のほかに案内記・図会・往来物等であるが、大島は道中記＝紀行文としているようで、道中記として林道春の『丙辰紀行』、烏丸光広の『日光紀行』といった著作などを掲げている。これに対し案内記には天明四年（一七八四）刊『新板東海道本曾路広駅道中記』の類が挙げられている。

さらに「結び」において平安時代から戦国時代まで続いた日記的紀行文が道中記に発達したものの、変形したもので幕末に旅が減少すると道中記は退化し、再び紀行文の性格を持つ道中記へと変化するとしている。

大島は本稿において筆者が旅行案内書としている道中記を、紀行文として論を展開しているため、本稿において述べようとする道中記とはかなり見解を異にするものであり、大島自身やや混乱されているようにも見受けられる。また大島は幕末にはかなり旅行者が減少したように述べられているが、一時的に減少しただけで数年に渡って減少したとは考えられない。まして旅行者の減少が旅行案内書を変化させたことはなく、変化したとすればほかに要因が求められるであろう。

三井高陽は『旅風俗』Ⅱに「道中記」を執筆している。三井は道中記を「案内書」と規定し、案内書は交通史研究上貴重な資料となるべきものと指摘している。道中記そのものについては、形態及び内容による分類を行っている。形態は堅又は横綴本の冊子、折本、一枚刷の四種に分類し、内容については次の二つに分類している。

（一）旅行用に携帯する他に、座右に備えて置くことも考えて作られる地理学的な文献の性質のあるもの。

（二）携帯用として編集されたもの。

（一）に属するものとして遠近道印（三井は道印を藤井半知としている）・菱川師宣の『東海道分間絵図』などを挙げ、（二）に属するものとしては東講発行の『五海道中細見記』のようなものを想定しているようである。三井自身も指摘しているが『東海道分間絵図』は通常旅人が携行できるようなものではない。三井が（二）に分類したもののこそ道中記であろう。

若干の疑問はあるものの、三井は道中記の本質について端的に述べている。

旅行案内書について本格的に論及したものが『道中記集成』別巻三に収録されている今井金吾の「道中記の発生と発展」<sup>(7)</sup>である。

今井は道中記とは実際の旅に役立つものと規定し、形態と内容による分類を行っている。形態分類は三井とほぼ同様であるが、内容については①文章のみ ②絵図形式 ③絵と文の併用 ④街道を描き宿場等の情報を記入したものに分類し、以下主要な道中記を取上げている。

なお今井は

いま残る道中記があまりにも少ないことがあるいは影響しているのだろうが、それは現代の多くのガイドマップと同様に、一旦旅を終わると、この道中記を処分してしまう人が多かったためだろう。実用書の運命といってしまえばそれまでなのだが――。

と述べているが、それは現在と近世を同一視されているからであろう。近世と現代では出版物の持つ意味は大きく異なっていた筈である。旅から帰ったからといって案内書を簡単に処分したとは考えられない。各地の旧家調査を行うと、しばしば旅行案内書や旅中無料配付されていたと思われる刷物がよく残されていることがある。これは旅の記念であり、家族や子孫が旅に行く時の参考のために保存したものである。旅行案内書を保存しておくことは近世だけではなく、昭和二―三〇年代ま

では行われていたのではないだろうか。旅行案内書に限らず本を捨てるということに對し多くの人々は抵抗感をもっていた。こうしたことから古書市場に出回らないからといって、処分されたと判断するのは早計であろう。

近代以降の旅行案内書について述べたものに、中川浩一の『旅の文化誌』<sup>(8)</sup>がある。本書は「ベデカ」を中心にしたものであるが、最終章「日本のガイドブックと時刻表」において明治以降戦前までの旅行案内書について概観している。近代以降の旅行案内書を概観したものとしては先駆的なものであろう。中川以降旅行案内書研究の基礎ともなる通史的研究はあまり進まなかったようである。その理由としてあまりにも旅行案内書の出版数が多く、全容を把握しにくいこと、それら案内書がある程度体系的に所蔵している機関がないことなどを挙げることができる。

しかし案内書そのものを利用した研究は行われている。ここでは多くの研究業績の中から岩佐淳一の「旅行とメディア―戦前期旅行ガイドブックのまなざし―」<sup>(9)</sup>を紹介しておきたい。岩佐論文の「はじめに」によると、「本稿ではメディアと旅行行動の関係をメディア論的視角から明らかにすることを目的としている。」とあるように、旅行案内書というメディアが旅行にいかに関与していたかを追求したものであり、旅行案内書について次のように概念規定している。

旅行ガイドブックとは、主として旅行をおこなう人の便宜や案内という特殊な目的を持って書かれた書物全般を指すと定義できる。

さらに「ガイドブックには旅行文芸的な内容を持つものと実用本位の大衆向けのものの二種類あることを指摘しておきたい。」と述べている。

岩佐論文は示唆に富むものの、「戦前期ガイドブックがどのようなまなざしを内包していたのかを検討」するために昭和九年度版『旅程と費用概算』<sup>(10)</sup>を利用しているが、本書は活字も小さく本文七三八頁、付録三二頁に及ぶもので、一般旅行者が手にするというより、旅行業などの

関係者が利用するものではないだろうか。岩佐はガイドブックは二種類あるとしているが、実用本位には大衆向けと旅行業関係者向けがあったとしてもよいだろう。

近代以降については誠に不十分であり、研究史とは言い難いが、本稿では基礎的研究であり、基礎作業でもある旅行案内書の変遷、通史的研究を近世から戦前に至るまで行おうとするものである。

## (二) 旅行案内書とその分類

ここで対象とする旅行案内書とは、原則として旅行案内を目的として執筆刊行されたものである。

旅行をする立場からみれば、旅行のための案内書とは前述のような旅行のために出版されたものとは限らない。紀行文・名所図会、時には随筆や小説等も旅行の案内書となりうるものである。一時期和辻哲郎の『古寺巡礼』を片手に奈良の古寺を歩く旅行者が多くいた。尤もこれは旅行案内書というより一種のステータスシンボルのようであった。如何に知的に古寺を巡っているかを証明するために。

旅行案内書はその内容からおおよそつぎのように分類することができ。但しこれは試験的分類であることを断っておく。

- ① 旅程に関する案内
- ② 地域に関する案内
- ③ テーマ別案内
- ④ ポイント案内

①は街道や鉄道沿線を案内したものである。街道の案内書とは東海道・中山道等の街道を案内したものや、西国三十三所等の道程を案内したもので、例えば明和七年（一七七〇）刊の『大日本道中行程細見記』（道中記集成20。以下、『道中記集成』所収のものはこのように注記する）・宝暦二年（一七五二）刊の『新板東海道分間絵図』（道中記集成9）・安政二



年（一八五五）刊『五海道中細見記』（道中記集成32）等々がこれに属するものである。本稿では旅程を中心とした近世の案内書を「道中記」と呼ぶことにする。尚、旅人が旅程中に記した日記を「道中記」・「道中日記」などとも称するが、筆者はこれを便宜上「旅日記」としている。

近代以降の旅程案内書とは主として東海道線等鉄道沿線の案内であり、本稿では「鉄道沿線案内」と表記することにする。但し、これはあくまでも原則であり、場合によっては異なる表記をすることを断っておく。

②の地域に関する案内とは①が線の案内であるのに対し、地域つまり面の案内といえることができる。具体的には日本全域を案内するものから、関東地方・各県の案内、湘南・房総といった地域を挙げたもの、さらに江戸・東京・京都・大阪など狭域についての案内書などである。②については東京・京都等狭域についてはさらに分類する必要があるかもしれない。

③は温泉・寺社参詣・登山・ハイキング・海水浴等テーマ別の案内である。

④は特定の社寺や施設等を案内したものである。④の多くは旅行案内書というより、目的の場所で購入したり無料配付されるもので、旅行の記念或は土産としての性格が強い。また特定の温泉地等を案内したものなどは原則として④に属するものであるが、温泉旅行の隆盛をみる時、特定の温泉についても③で取上げるべきだろう。

以上のように分類を試みたが、①はどちらかというと目的地に達するまでの案内であり、③以下は目的地の案内といえるだろう。分類に固執すると本質がみえなくなることがあるが、取り敢えず以上の分類のもとに稿を進めていくことにする。しかしここで①から④までの旅行案内書を取上げることができないので、①の旅程に関する案内書を中心に述べていくことにする。

## ② 道中記

### （一）道中記の刊行

旅の時代における旅行案内書の中心は道中記である。徒歩による移動において旅人は全行程のどの辺りに居るのか、さらに次宿までどれほどあるのかを知る必要があっただろう。そのためには街道全域を案内する旅行案内書Ⅱ道中記が必要であった。公用や商用などの旅人は只管目的地に向かうため、簡便な道中記でもこと足りたかもしれないが、寺社参詣をはじめとする遊樂的な旅は目的地に達するまでの名所・史跡等々を見物したため、こうした案内を記した道中記が便利であった。

以下本稿で取上げる道中記の大半は『道中記集成』によったが、原標題不明のものは原則として監修者今井金吾の付した標題に依った。刊年不明のものもまた原則として今井の考証に依った。

道中記がいつ頃から出版されるようになったのか定かではないが、明暦元年（一六五五）あるいはそれ以前に出版されたとみられる中山道の道中記が現存する。本書は題簽が欠けているため、内題の「日本道中名所尽」（道中記集成Ⅰ）を標題としている。本道中記は国立国会図書館にも収蔵されていたが、現在は行方不明になっているという。この国会図書館本を朝倉治彦が模写し、それを今井が調査しているが、題簽には「きそ名所尽」とあったという。今井は『道中記集成』に収録（道中記集成Ⅱ）せず『日本道中名所尽』としたのは慎重を期してのことであろう。

『日本道中名所尽』の内容はまず須弥山図が掲げられ、続いて月の満ち欠け図、そして昼夜の長短を知るために、二四節氣の日月の長短と日の出・日の入りが二ウから一三ウまで記されている。本文には江戸から

大坂までの宿駅間里程・駄賃及び簡単な名所案内、大坂からは諸方への里程が記されており、道中記の基本が既に出来上がっていたことを知ることができる。

刊記を有する最も古いものが明暦元年刊の東海道の道中記である。本道中記は現在のところ三井文庫本が知られているだけで『道中記集成』一には三井文庫本が収録されている。三井文庫本は数丁欠損しており、三井文庫では標題を『明暦板道中記』としているが、今井は『道中記』の標題を付している。

『道中記』は冒頭数丁が欠けているため内容の一部は不明だが、三井文庫本は「出行吉凶之事」から始まっている。本文冒頭には

かんだ見付より日本橋迄十三町有

あさくさ見付より日本橋迄十四町有

とあり、当時神田見付・浅草見付が何んらかの意味を持っていたことを窺わせる。街道に関する情報としては宿駅間の里程、本馬と空尻の賃錢及び名所について記されている。

『道中記』の中で最も注目されるのが橋の記載である。『道中記』には主要な橋とその長さが記されている。旅における主要な見物対象の一つは建造物であるが、橋もその一つであり旅日記にもしばしば橋の長さが記されている。『道中記』の橋の長さの記載は、そういう要求に答えるためであろうか。

『日本道中名所尽』・『道中記』は近世における最重要路であり、交通量も多かった中山道・東海道の道中記であるが、万治元年（一六五八）頃には江戸―金沢―京都間の道中記『北国通名所尽』（道中記集成上）が出版されている。その行程は江戸を出発して中山道追分宿から善光寺・高田・糸魚川・富山を経て金沢に達し、金沢の項には次のように記されている。

金沢 森下より一里半

（駄賃カ）  
三十三文

江戸より百拾五里

金沢より京迄かちミち六十寺り

同所よりひだの高山へ三十六里

同所よりゑちせんの今庄□三十一里

同所よりワかさ小はま迄五十里

金沢より京迄の道程

右の記載は明らかに『北国通名所尽』が金沢を中心としたものであることを示している。末尾に「金沢より京迄之道程」とあるように、金沢から大聖寺・北庄・武生・今庄・今津・坂本を経て大津から京に至る案内がなされている。

忠田敏男の『参勤交代道中記』<sup>①</sup>によれば、加賀藩の参勤交代路は①金沢から富山を経て中山道へ出るルート。②金沢から福井を経て中山道へ出るルート。③金沢から福井を経て東海道に出るルートの三ルートがあった。『北国通名所尽』の江戸から金沢の案内は①にあたる。①は参勤交代路であるのに対し、金沢からは京への道が案内されている。このことからみて『北国通名所尽』は金沢の在住者が江戸及び京に出ることを目的として作られたようである。

江戸―金沢間の道は富山経由以外に二つあったが、忠田によれば江戸―金沢間の距離は①が一里、②が一六四里、③が一五一里と①は三ルートの中で最も距離が短かく、全行程のうち三〇里程が加賀藩領であった。参勤交代の藩主にとっては都合がよかったようだが、一般の旅人も他領を往くよりは不安が少なかったであろう。但し親不知子不知をはじめとする難所を通らなければならなかった。加賀藩は大藩ではあるが、このような道中記が近世前期に刊行された背景については調査する必要があるだろう。

なお『北国通名所尽』は江戸から中山道追分宿までと、巻末の京の市中案内、大坂より諸方への里程は『日本道中名所尽』の板本を一部埋木

して利用したものである。

以上のように明暦期には道中記の基本ともなる内容を有したものが登場し、それを追うようにして東海道・中山道以外の道中記も出版されるに至ったのである。

## (二) 道中記の成立

明暦期には道中記の基本ともなるべきものが出版されたが、延宝期(一六七三〜八〇)には道中記の完成をみたようである。それを象徴するものが東海道を案内する『増補江戸道中記』(『道中記集成3』)及び『諸国安見回文之絵図』(『道中記集成2』)である。両書の本文の文章は非常に酷似しており、両書のどちらかが先に出版され、どちらかがそれを利用したわけである。以下今井の考証をもとにいずれが先行するものであるのか、さらに『道中記集成』収録のものは両書とも再版とみられるので、初版の刊行についてみておきたい。

『道中記集成』所収の『増補江戸道中記』は刊年不明であるが、巻末の東海道・中山道の駄賃が正徳二年(一七一三)頃のものであることからこの頃の出版としている。「増補」とあるから当然それ以前に『江戸道中記』は出版されていたわけである。『増補江戸道中記』については『耽奇漫録』<sup>(13)</sup>下に取上げられている。同書には

増補江戸道

中記 延宝三年  
二月開板

とあり、ほかに宮から桑名までの記事の一部などが写し取られ、次のように考証している。

按するにこの道中記の原板ハ、慶安正保のころに梓行せしものなるを、延宝三年の春増補再板せしなるへし。

『耽奇漫録』所収の内容は正徳二年頃刊とみられる『増補江戸道中記』と比較すると、駄賃の項目を除けば文章も改行もまったく同じである。

これにより延宝三年(一六五七)に刊行された『増補江戸道中記』が正徳二年頃に再刊されたことは明らかである。

馬琴は延宝三年開板の原板は正保・慶安の頃としているが、今井はいくらなんでも早過ぎるとしている。今井が言うように正保・慶安の頃にこれだけの道中記が出版されていれば、明暦元年刊の東海道の『道中記』も違った内容になっていたであろう。

今井は延宝三年板の原板について明暦三年の『道中記』に着目している。平凡社東洋文庫版の『東海道名所記』<sup>(14)</sup>二の解説において朝倉治彦は『東海道名所記』の依拠本として明暦三年の『道中記』を挙げ、『東海道名所記』に付した注においても頻繁に明暦三年の『道中記』を引用しているが、朝倉によれば使用した『道中記』は明暦三年三月、江戸日本橋一丁目本屋太郎右衛門刊行、絵入、句入りの豎小本、九二丁本である。朝倉が引用した『道中記』は朝倉所蔵のものなのかどうかは明記していないが、木村捨三が首尾を欠いた入木後印本を所蔵、岡山大学に完本とみられるものが所蔵されている。

明暦三年の『道中記』については今井自身(筆者も)原本を実見していないが、今井は朝倉校注の『東海道名所記』の注に引用された文をもとに考証した結果、その記述が『増補江戸道中記』とほぼ同文であるが、増補版に掲載されている伝承等はほとんど記されていないという。次に朝倉の注に引用してある小田原の記事と、増補版の小田原の記事を併記してみよう。

(明暦三年『道中記』<sup>(15)</sup>)

右の方入口に小田原陣の時の陣場有、町の内にすぢかへばし有、町はづれに地藏堂有、かさまつり、左に松山有、いしかけ山といふ所、太閤の御陣場なりと云、いりかた、小田原石はより出るなり、湯本右方にそうおんし、とうの沢みゆる、

(『増補江戸道中記』)

江戸より廿四里四町、宿よし、右の方入口におたはらぢんの時のぢんば有、町の内にすぢかひばし有、町はづれに地さうだう有、▲かさまつり、左にすぎ有、いしかけ山といふ所、太閤の御ぢんはなりと云、▲宿の右の方に外郎あり、東国一の名物也、▲左に有松山に氏直せむる□太閤秀吉むかひぢんを□□にひし所也、名物には小田原石、水道のために江戸に出しあきなふ、小田原夢想の枕有、足駄けやきの丸ほ、りなり、▲ゆもと、右の方にそうおんじ、とうの沢見ゆる、(傍線筆者)

傍線部分が増補された箇所である。先ず宿場の良否が加えられ、名所旧跡が詳しく記されている。旅人にとって関心事である外郎・小田原石・夢想枕・足駄などの名物・名産の記事が挿入されている。このうち小田原石については明暦三年版にも記されているが、江戸の「水道」に利用すると増補版では詳しく記されている。また「かさまつり」(風祭)の項では『道中記』には「左に松山有」とあり、『増補江戸道中記』には「左にすぎ有」とある。

以上のことから今井は明暦三年の『道中記』を増補して延宝三年の『増補江戸道中記』が出版され、さらに運賃等を改訂した正徳二年頃の『増補江戸道中記』に続くとしている。次に『諸国安見回文之絵図』(道中記集成2)も今井の考証をもとにみていこう。『諸国安見回文之絵図』もまた刊年不明であるが、今井は大名の配置などから貞享二年(一六八五)頃の刊としている。さらに藩主名の大部分が入木をして改訂した跡がみられることから『道中記集成』収録本は再版であるとし、序文に「ちかき比ミやこのらくあみだ仏とやらんが道中名所記有」という記事があることから、これが『東海道名所記』を指すとし、『諸国安見回文之絵図』は寛文から延宝にかけての出版ではないかとみている。

ここで『諸国安見回文之絵図』の小田原部分をみてみよう。

▲右の方入口おだはらぢんのときぢん所あり、町の内にすぢかへば

し有、町はづれに地さうたうあり、町より右に城有、しろぬし大久保加賀守殿、しゆくの内を外郎の名物あり、▲かさまつり、左に松山有、其上に杉の林有、▲石かけ山太閤のぢん場也といふ、小田原石、小田原あしだ并むさうまくら、小田原わん此所の名物、江戸へをくりあきなふ也、▲ゆもと、右の方にそうをんじ、とうの沢はしより右急行、

右の文と『増補江戸道中記』を比較してみよう。先に「かさまつり」の「松山」と「すぎ山」について述べたが、『諸国安見回文之絵図』には「かさまつり、左に松山有、其上に杉の林」とあり、どうやら『増補江戸道中記』の杉山は誤写のようである。『諸国安見回文之絵図』に「其上に杉の林」とあるのを見て間違えたのであろうか。

『増補江戸道中記』も『諸国安見回文之絵図』も藩主の記載があり、小田原は『諸国安見回文之絵図』に城があり、藩主は大久保加賀守とあるが、『増補江戸道中記』にはその記載はない。入れ忘れたのであろうか。一方名物については『増補江戸道中記』のほうが詳しい。

結論として今井は明暦三年版『道中記』を増補して延宝三年に『増補江戸道中記』が出版されたのであろうとしている。今井が最終的に『増補江戸道中記』が先行すると判断した理由は「増補」にあるようだ。しかし今井は『諸国安見回文之絵図』の解説の末尾において、

『増補江戸道中記』の初版は延宝三年(一六七五)が初版で、これをわざわざ増補と断っているところから見ると、それ以前の寛文年間(一六六一―一七三)にはオリジナルの『江戸道中記』があり「回文」はその「江戸道中記」の文章をそのまま利用したのではないかとみている。

これによると明暦三年の『道中記』と『増補江戸道中記』はまったく別の系統のものになってしまうが、『道中記』を増補したものが『増補江戸道中記』ということであろう。いずれの系統を引くか、どちらが先



きかはこれくらいしておこう。ここで重要なことは延宝期にこのような道中記が出版されたということである。

『増補江戸道中記』と『諸国安見回文之絵図』の文は酷似しているため、その本文をもとに甲乙は付け難いが、『諸国安見回文之絵図』は豎冊で上段に文、下段に東海道の絵地図が刷られた画期的なものであった。絵地図については今井はその解説の中で、

浮世絵研究家・鈴木重三氏と話し合った結果、「浮世絵版画の開祖として知られた菱川師宣に間違いなだらう。一応、伝師宣としておいたかどうか」という結論になった。

ということと今井は絵図を伝師宣としている。これまでの道中記にも挿画はあるが、それは実用的なものではなかった。これに対し『諸国安見回文之絵図』の絵図は江戸から京まで連続するもので、その内容は名所旧跡の案内を中心としたものだが、河川と橋は詳しく描かれている。時折り街道を往く旅人が描かれているが、その人物の描写は遠近道印・菱川師宣作元禄三年刊の『東海道分間絵図』に描かれた人物と似ているようでもある。『東海道分間絵図』は道中記を含む東海道絵図に大きな影響を与えたものと考えられているが、ここではこの程度に留めておく。

明暦元年あるいはそれ以前に刊行されたとみられる中山道の道中記『日本道中名所尽』、明暦元年及び三年刊東海道の『道中記』からも分るように、明暦あるいはそれ以前に携帯用の旅行案内書Ⅱ道中記はほぼ出来上がっていたのである。その後、延宝期に『増補江戸道中記』・『諸国安見回文之絵図』のような道中記が出版されるに至り、道中記は完成を見たというか、その形式が定着していったとしてよいだろう。特に『諸国安見回文之絵図』は文と絵図からなる道中記の完成したものと位置付けることができる。

### (三) 貝原益軒と道中記

道中記の基本的パターンが出来上がって以降注目される道中記の一つは、当代一流の学者貝原益軒の旅の記録をもとに出版された道中記である。

福岡藩士貝原益軒の紀行文『東路記』と『己巳紀行』が板坂耀子の校注により活字化されたが、板坂はその解説において益軒の紀行文について詳述しているので、ここではその解説により益軒の紀行文についてみてみよう。

益軒は旅を好み、藩の公用旅行を利用しては各所を旅し旅の記録を残したが、その主要なものが『東路記』・『己巳紀行』である。この二点の記録を京都の書肆柳枝軒こと茨木屋多左衛門が巧みに編集して数点の紀行文にまとめ、出版している。

写本として伝わった『東路記』・『己巳紀行』は板坂によって初めて活字化されたが、木板本として刊行されたものはこれまでいくつか活字化されてきた。柳田国男校訂の『紀行文集』<sup>(16)</sup>に収録された『吾妻路之記』・『岐蘇路記』を初めとする紀行文集もその一つである。柳田はその解説の中で益軒の紀行文について次のように述べている。

第一に貝原翁の六種の紀行は、時に元禄以後に於ける我邦の読書界、及び旅行技術の進境を、間接に啓示して居る点で興味がある。此頃までの旅人の生涯の思出草は、都登りと江戸見物であって、それ故に幾つかの通俗なる案内記が、相繼いで出版せられて居る。其卑近と低調とが漸く倦まれ一方には地理と歴史が少しづつ、精確を加へて来て、注意は次第に道途田園の事物に向けられるやうになって来たのである。

と述べているが、柳田の指摘について板坂は「いわゆる従来の主情的、詠嘆的な紀行ではなく、知的な情報伝達を主とした近世紀行の基礎を築いたとする指摘は早く柳田国男によって行われた。」と評価している。しかし柳田の適切な指摘にもかかわらず、「近世紀行全体の把握と評価

はそれ以降も必ずしも充分になされなかったため、益軒の作品が持つそのような意義もまた充分に人々に意識されるには至らなかった。」と板坂は述べている。そして益軒の紀行文については次のように述べている。

要するに、彼の紀行の一見文学らしからぬ表現や形式を未熟とか怠惰とか乱雑という姿勢の結果ととらえては誤りなのではないかといいたいのである。

板坂は益軒の紀行文が不当に低く評価されてきたことを強く指摘しているのである。

柳田と板坂は益軒の旅の記録を紀行文としている。このことについては若干後述するが、筆者は少なくとも出版された益軒の旅の記録のうち『岐蘇路記』と『吾婦路記』『日光名勝記』などについては道中記としてみている。

ここで出版された益軒の紀行文＝道中記についてみておこう。

益軒の主要な紀行文である『東路記』は貞享二年（一六八五）八月に、『己巳紀行』は元禄二年（一六八九）八月に成立している。両書と刊行された紀行文との関係については、板坂が図表化しており、それによると『岐蘇路記』・『日光名勝記』・『吾婦路記』は『東路記』をもとに編集され、『岐蘇路記』は正徳三年（一七一三）、『日光名勝記』は同四年、『吾婦路記』は享保六年（一七二一）に出版されている。

『諸州巡覧記』は『己巳紀行』をもとに、『統諸州巡覧記』は『己巳紀行』と『東路記』をもとに編集され、両書とも正徳三年に出版されている。

以上の出版物のうち『吾婦路記』が刊行されたのは益軒歿後のことであり、内題脇の注記によれば貝原益軒と、山崎闇斎門下の谷重遠の旅の記録をもとに編集したという。紀行文出版に際し、益軒と柳枝軒の間にどれ程の話し合いがあったかは不明であるが、『吾婦路記』は全く柳枝軒の意図によって出版されたものである。そのためここでは『岐蘇路記』についてみてみよう。

『岐蘇路記』は上下からなり、上は江戸から上松の手前迄、下は上松から京迄で、巻末には「木曾街道宿付」として次宿迄の距離と駄賃の一覧が掲げてある。

次に本文の中から高崎宿の項を摘出しておこう。

高崎より板鼻へ一里三十町

高崎の町家千軒ばかり、左の方面部越前守殿城あり、高崎の辺より信濃の浅間の嶽よくみゆる、高崎の南に高き岡あり、是によって高崎と号するならん、其岡の後に館と云村有、烟草を多く作る、たてたばことて当世の名物也、高崎の辺にも烟草多く作る、

筆者は国文学を専攻しているわけではないので、紀行について確たる自説があるわけではないが、少なくとも『岐蘇路記』をみる限り紀行文というより簡潔な旅の案内文とみてとれるのだが。尤もこれが紀行文であるということであれば、益軒の著作のみを紀行文として評価するだけではなく、所謂道中記の中にも紀行文として評価すべきものがあることを認めるべきであろう。

ここで『岐蘇路記』が出版される一二年前に出版されたとみられる『木曾懷宝道中鑑』（道中記集成2）の高崎宿についてみてみよう。本書の出版年について今井金吾はその解説の冒頭では正徳元年（一七一）の刊としているが、本文中では正徳二年としており曖昧であるが、正徳元々二年頃の刊とみてよいのだろう。本書は上段に石川流宣画の中山道の絵図、下段に文章による案内がある。

高崎より

といや  
与三右衛門

いたはなへ一里卅町

のりかけ七十六文 からしり四十九文

江戸より高さき迄廿六り十五丁

高崎の城左にあり、城主間部越前守殿 五万石宿よし、上州たはこしなく、木綿たび名物也、▲鳥川橋あり、此川高崎の城を取まわす、宿より一里余なり、両度わたる、是より前橋の城主領分なり、右の方に佐野、宿舟はしの跡有、後撰に

東路の佐の、舟橋かけてのミ

思ひ渡るとしる人のなさ

此所むかしハ入海なりと云、さもあるへし、峯にかき、はまくり貝つきてあるといへり、此所に松山あり、右大將源頼朝公朝夕のさかなを召上られたる所となり、此山を肴山と云、

▲石井むら ▲藤塚むら ▲八幡村 小川あり

佐野の舟橋の記事は『岐蘇路記』では倉賀野宿の項に記されているが、『岐蘇路記』と『木曾懷宝道中鑑』の文に格段の差があるとは思えないし、先の引用文中において柳田は「通俗なる案内記が、相継いで出版せられて居る。其卑近と低調とが漸く倦まれ」と書いているが、益軒の紀行出版以前の多くの道中記の内容が柳田の言うほど通俗・卑近・低調とも思えないのである。

紀行文・道中記に拘泥しすぎてしまったが、どうも文学の分野では紀行文は文学作品であるが、道中記は卑俗なものという既成概念があるからではないだろうか。道中記は基本的には文学とは別の次元で評価すべきものであろう。

道中記も稚拙なものから優れたものまでさまざまであるが、益軒の著作や『木曾懷宝道中記』などは恐らく近世においても、文学作品とは異なる次元で高く評価されていたであろう。こうした道中記はその後の道中記にも影響を与えたようで、後述する『岐蘇路安見絵図』などは益軒の

著作と『木曾懷宝道中記』の影響を強く受けている。

一七〇〇年代は正徳元年頃刊の『木曾懷宝道中記』を皮切りに、次に述べる絵図形式の道中記も含めて名作といえる道中記が多数出版された時代であり、その頂点に位置したのが益軒の道中記であった。

益軒の道中記・紀行文を旅中利用した事例として天保九年（一八三八）土佐藩士安田相郎の旅がある。<sup>(19)</sup> 広江清によれば、安田相郎は土佐藩中老職正義の三男で、天保九年三月二八日参勤する藩主に供奉する家老深尾内匠の付属として高知を出発、伏見で一行と別れ、大和を中心に関西の旅を楽しんでいる。広江は大和巡りを大坂からではなく伏見から奈良へ出たのは、益軒の『和州巡覧記』に依つたためと指摘するが、指摘通り日記の中には『和州巡覧記』が「貝原記」として何度か登場する。

相郎は「貝原記」を片手に観光地の案内人を遣込めているが、奈良では手引（案内人）に次のように言わしめている。

手引曰、年々手引不絶仕候へとも、誠の風流を以来者少きよし、皆上方辺の遊人多きよし、たま／＼関東よりは貝原記など所持して来る人、西国にて貴君計くはしく御尋の方は、初て手引よし申す、相郎は吉野でも「貝原記」をもとに案内人に質問しては閉口させ、案内人をして次のように言わしめている。

私当年六十才に相成、先年より手引仕候へとも、あなた程六ヶ敷御尋の方には出合不申、十九才の時壺人御座候処、其時分は私義も年若の事故、中程にて逃て帰り候、其後今壺人御座候、其外に無御座今度にて只三度也と、言ひて大笑也、

相郎としては得意満面であつたろうが、案内人は明日と明後日の案内を頼み込み、相郎もこれを受け入れている。客をおだて上げる案内人の方が一枚も二枚も上手であつたろう。『和州巡覧記』（題簽「大和めぐりの記」）は元禄九年に刊行され、享保六年・文化十二年と版を重ね、天保に至ってもまだまだ利用されていたわけであるが、案内人の話による

と、関西ではあまり使われず、関東からの旅人の利用が多かったようである。

一七〇〇年代は優れた道中記が出版された時期であり、旅も大衆化してきた時期と推測されるが、道中記の大衆化にはまだ至っていない。それは識字率の問題、そして道中記の価格も庶民が求めやすいものではなかったであろう。利用者は武家やある程度の教養を持った富裕層であつたとみられる。

ここで若干旅日記からみた識字率について記しておきたい。識字率といっても旅日記であるから文字を書くということである。現存する旅日記をみると一八〇〇年代のものが圧倒的に多く、それに較べると一八〇〇年以前のもものは極めて少いのである。大田区立郷土博物館における「特別展弥次さん喜多さん旅をする」の展示図録に、桜井邦夫は一〇〇点の旅日記を一覧表にまとめているが、これによると一八〇〇年以前の旅日記は安永三年（一七〇六）から寛政十一年（一七九九）までの僅か一三点である。<sup>21</sup> 旅日記の残存状況だけからみると、一八〇〇年頃を境に識字率に大きな変化が生じたようである。勿論識字率の問題だけではなく、日記を書く必要が生じたのかもしれないこと、旅の記録を多くの人々が残したいという欲求を持つようになったのではないかということを考慮しなければならない。

#### （四）絵図形式の道中記

街道の絵図は貞享二年頃刊『諸国安見回文之絵図』、正徳元年頃刊『木曾懷宝道中鑑』に既に取り入れられている。『諸国安見回文之絵図』は上段に文章、下段に東海道の絵図が配され、『木曾懷宝道中鑑』は上段に中山道の絵図、下段に文章が配されているが、あくまでも文章が中心であり、絵図は従である。絵図は眺めて楽しむものとみられる。正徳三年頃刊『東海道懷宝道中記』は『木曾懷宝道中鑑』と対をなすものであ

り、内容に大きな違いはない。

絵図の精度は別にして、正徳期に絵図入道中記が出版されたが、その後暫くの間は絵図入道中記は作られなかったようである。再び道中記に街道絵図が登場するのは一七五〇年代から六〇年代にかけてのことであるが、それも街道絵図のみの道中記であることで、立て続けに絵図のみの道中記が作成、出版されるようになっていく。

絵図形式の道中記は、寛延四年（宝暦元年（一七五一））刊『伊勢道中行程記』（道中記集成9）がその最初とみてよいようである。本書は折本仕立て大坂より伊勢へ向けての道中記である。

翌二年には元禄三年（一六九〇）刊の『東海道分間絵図』をもとにした『新板東海道分間絵図』（道中記集成9）が出版された。

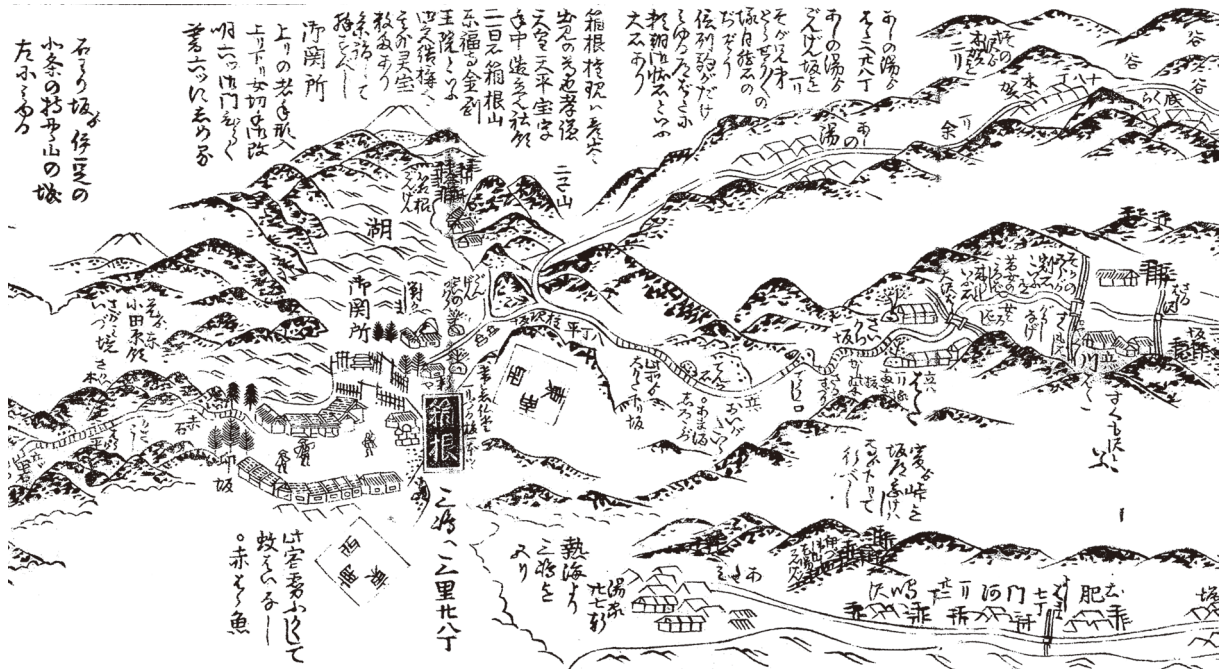
『東海道分間絵図』の地図としての正確さ、絵画としての質の高さは広く知られるところであるが、本絵図は全五冊折本仕立て、その法量は国立国会図書館本では縦二八cm、横一六・五cm、総延長三五・九mにも及ぶもので、とても旅中携行できるようなものではなく、その形態からみて机上で見ても楽しむものであった。

この『東海道分間絵図』をもとにして出版されたものが『新板東海道分間絵図』であるが、本絵図は縦二二・四cm、横九cm程の折本仕立て総延長一一・四一m程というサイズであるため、容易に懷中できるものであった。『東海道分間絵図』に較べると精度はかなり落ちるが、縮尺は凡そ三万六千分の一の縮尺であり、その凡例には次のように記されている。

一 遠近道印作の分間絵図年を経て道の付替りたる所多し、故に今改正増補し、且懷中の小折となし、旅行の一助とす、  
但し古図ハ三分一丁の積り也、此図は一分二丁の積りを以てしるす、  
曲直筆端の及ハさる所あらんのみ

『東海道分間絵図』はその名のごとく東海道のみを描いているが、『新





『新板東海道分間絵図』安永9年刊 箱根宿



『江戸道中勝景行程記』宝暦9年刊 箱根宿

板東海道絵図』は鎌倉江の島道・大山路・熱海道・箱根温泉道・身延道・鳳来寺道・本坂道・伊勢参宮道・中山道が収録されている。東海道以外は縮尺を無視したものであるが、当時の旅人のニーズに応えた街道・情報盛り込まれている。内容は詳細を極め、寺社・名所旧跡・伝承・名物そして随所に古典を引用している。一里塚などは塚上の樹種まで記され、街道を往く人物も多く描かれているので、机上での鑑賞にも堪えるものである。

『国書総目録』によれば、『新板東海道分間絵図』は宝暦二年（一七五二）刊を初版とし、明和九年（一七七二）、安永四年（一七七五）、天明年中（一七八一～八八）と版を重ねているが、筆者所蔵本の巻末に「安永九子年正月改」とあることから、このほかにも出版されていたようである。各版すべてに目を通したわけではないが、版によっては説明文が書き改められている。

明和五年（一七六八）刊の『初版は宝暦四年』『木曾道中勝景行程記』（道中記集成13）は折本仕立てで、中山道を太坂から江戸に向けて描いたものであるが、大坂より栗田口山・蹴上の辺りまでは、寛文四年刊の『伊勢道中行程記』の版木をそのまま転用している。洗馬からは上段に中山道、下段に善光寺道を描いている。善光寺道は松本経由で善光寺に達し、善光寺からは上田・小諸経由で追分に至り、中山道に合流するルートである。本絵図は絵の粗さは目立つが、優れた道中記といえよう。『国書総目録』によれば、宝暦四年・明和五年のほか天保十二年（一八四一）にも出版されている。

宝暦六年（一七五六）刊『岐蘇路安見絵図』（道中記集成11）は横帳の冊子仕立て冒頭には次のように記されている。

岐蘇路を委く記せる書ハ、貝原先生の木曾路の記と、千鐘堂の木曾懷宝鑑の両書のミ也、今此二書によつて誤りを正し、もれたるを尽し、猶また見安からんが為に、宿より宿の間を一紙の一ト面に絵図

に題し、題して木曾路安見絵図と号するのミ

桑楊編

右によれば本書は貝原益軒の『岐蘇路記』と石川流宣の絵図が掲載されている『木曾懷宝道中記』を参考としている。「宿より宿の間を一紙の……」とあるのは、各丁の表と裏で二宿分を描いているということ、例えば二丁表の冒頭に板橋が、三丁表の冒頭には麻宿が描かれているため検索が容易である。

一丁の表裏で次宿までを描いているため縮尺は一切無視されているが、街道筋の特長をよく描き情報量も豊富な道中記である。本書にも善光寺道が描かれているが、既に中山道に善光寺道を付属させることは当然のこととなっている。

宝暦九年（一七五九）刊の『江戸道中勝景行程記』<sup>(2)</sup>は前述の『伊勢道中行程記』・『木曾道中勝景行程記』同様に大坂を起点としたもので、大坂から関宿の辺りまでは『伊勢道中行程記』の版木を利用している。『伊勢道中行程記』・『木曾道中勝景行程記』そして『江戸道中勝景行程記』は三部作とも言えるものである。

三部作の中でも『江戸勝景行程記』は文字情報も絵画情報も多い。東海道を軸に画面全体に派生する街道や山々が描かれ、そこに多くの文字情報が入っているため、『新板東海道分間絵図』と比較すると非常に見にくいものとなっている。『新板東海道分間絵図』を意識して情報をつめ込み過ぎてしまったのであろうか。

明和二年（一七六五）刊の『東海木曾道中懷宝図鑑』（道中記集成11）は縦一六cm、横一一cm程の縦冊で、上段に東海道下段に中山道が描かれており、その凡例には次のようにある。

一此両道中記ハ上の方に東海道を写し、下の方に木曾路を図して何れの道を行にも重宝とす、

一紙壹枚の面を一宿と定て是をしるす、



一東海道ハ上りを順に記し、木曾ハ下りを順に記す、若東海道を下るにハ奥より逆に見るとしるべし、木曾路も是に順してしるべし、一中仙道・伊勢路、其外本文に略図ありといへとも奥に書出するものハ且は委く、且ハ見安からむ為也、

これによれば本書もまた宝暦六年刊の『岐蘇路安見絵図』同様各丁の表裏で一宿分を描いている。両道のうち東海道は江戸を起点としているが、木曾路・中山道は京都を起点としている。

先きの三部作は大坂を起点としたが、それは関西方面からの旅人を対象としたこと、さらに幕府が江戸に開かれて以降、何事につけても江戸が中心になっていくことに對するある種の抵抗ともいえる。これに對し本書の場合、中山道だけが京都を起点としているのは、東から西への旅人の多くが往路は東海道を、復路は中山道を歩いたからであろう。

明暦期に道中記の基本ともなる内容を有した東海道・中山道の道中記が出版されると、続いて金沢から江戸への道中記『北国通名所尽』が発行されたが、絵図形式の道中記の分野でも東海道・中山道を追うように、寛政年間（一七八九～一八〇〇）に金沢より江戸までの絵図道中記『新板江戸道中細見図』（道中記集成18）が出版されている。折本仕立で出版も加賀金沢安江町の能登屋次右衛門で、そのルートも北国通である。

出版元などの関係はあるものの、一七五〇年代から六〇年代にかけて集中的に優れた絵図形式の道中記が出版されたが、それ以降これらの道中記を越えるものが作られることはなかった。それは旅の大衆化により安価で手軽な道中記が求められるようになったからであり、文章による道中記もまた同様であった。幕末に至り五雲亭（玉蘭齋）貞秀の鳥瞰図『東海道写真』五十三駅勝景が出版されたが、気軽に懷中できるものではなかった。そのため一七五〇～六〇年代にかけて出版された絵図形式の道中記、特に『新板東海道分間絵図』などは幕末に至るまで利用されたようである。

## （五）道中記の普及

一八〇〇年代に入ると道中記の出版は一気に増加した。その要因を特定することはできないが、一八〇〇年前後から旅行人口がより増加したとみられること、識字率が向上したこと、そして浪花講・東講をはじめとする講の成立により、講中が道中記を出版するようになったことなどが考えられる。ここでは講中出版の道中記についてみていくことにしよう。

伊勢参宮など特定の寺社へ参詣するための講は古くからあったようであるが、旅宿組合ともいべき講の嚆矢は浪花講であった。大島延次郎によれば、浪花講は文化元年（一八〇四）に大坂玉造上清水町の松屋甚四郎と江戸の鍋屋甚八が講元となり、甚四郎の手代松屋源助を發起人として組織された。

松屋は綿打器の販売を業としており、手代源助は商売のため諸国を旅したが、その経験をもとに浪花講を組織した。要するに浪花講は実質的には松屋源助によって組織運営されたものである。主人である松屋甚四郎も綿打器販売業から浪花講、宿泊業に転職したのである。浪花講は看板を作り、これを講中加入旅宿に配付し店頭に架けさせたが、看板には講元として松屋甚四郎の名が彫られているものの、鍋屋甚八の名は彫られていない。

浪花講の創始年代について今井金吾は文化一三年としているが、<sup>(23)</sup>ここではこのことについて検討はしないが、浪花講が旅宿組合の最初であることに変わりはないし、後述するように浪花講の前身は文化以前に存在したらしい。

その後天保元年（一八三〇）には大坂道頓堀日本橋詰の河内屋茂右衛門が江戸馬喰町の荳屋茂右衛門と共に三都講を組織。安政二年（一八五五）頃には江戸湯島天神表通りの大城屋良助が發起人となり、

東講が成立している。

こうした講中が道中記の出版をはじめたわけであるが、講中出版の道中記で最も古いものではないかと今井の指摘しているものが、寛政頃刊とみられる一枚摺の『定宿附道中記』（道中記集成39）である。東海道・中山道をはじめとする諸街道宿駅間の人馬賃銭及び定宿が記されているものであるが、定宿附つまり指定旅籠名が記されているということは、『定宿附道中記』が旅宿組合の關係で、それも浪花講を組織している過程で出版されたとみられるのである。

日本橋の項には

日本橋本馬九十四文

馬喰丁四丁目

から尻六十一文

いせや嘉兵衛

二り人足四十七文

同伝馬丁二丁目

なべや甚八

と浪花講講元の一人である鍋屋甚八の名が見え、大坂の項には

日本はし北へ二丁

まつや源介

の名がみえる。このことからこの頃浪花講がある程度組織され、その關係で『定宿附道中記』が出版されたとみられるのである。その關係とは旅人が講中に加加入すると、その証明として『定宿附道中記』が配布されたと考えられることである。旅人は指定の旅籠屋に『定宿附道中記』を提示し組合員であることを証明したのであろう。

浪花講が本格的な道中記を出版したのは天保一〇年（一八三九）のこと

## 自序

夫聖代昇平の恩沢に浴して四民業を安じ、商売ハとほく独歩して  
国用を通ず、これ特此思の貴をしらしべし、予も遙国々に交易  
し、既に西の国より東おく陸の果におよべり、よて平常に往還し

て、駅舎の好悪、問憩淨穢、廉飯、佳酒の有ところまで  
おのづから寛り、私に拔萃輯録して浪花組道中記と題せり、按ふに  
父母の国をはなれ遠き境二いたり、いとこ、ろ孤きことのミ多かる  
中に、偶客舎の実意なるぞ、したしき族の心地して馮しくそ覺  
ゆれば、こたび此津にて旅買せる、人々打かたらひて、浪花く  
ミと号一構の因をむすび、此定宿付を印刷して尚旅行にうゐ  
くしき人の便ともなれかしとす、されバ此小冊を懐にし、ことに  
ふれ迷惑されば、強徳宿引も黙然として雲助とても予直をいは  
ず、また行偷等のうれひをも免れければ、実に長途の安全守護神  
となり、おのづから国忠の端ともならんがし、

天保七年

申の二月

大阪玉造上清水町

講元 松屋甚四良誌

（適宜原本のルビを付した。以下同じ）

諸国を歩いて商売をしたので、その経験をもとに本書を編集したとい  
うが、この一文をみても浪花講は手代の源助が取り仕切っていたらしい  
ことが分る。また浪花講成立に関しては諸国を旅する商人が相談してつ  
くり上げたところ。

浪花講設立の具体的な目的と道中記刊行の本来の目的については口述  
に記されている。

## 口述

諸国道中筋の定宿并ニ休憩ごとに、此通り木のかんばん掛置し也、  
是を目当ニ御泊り有べし、さすれバ売女飯もり等す、めらるうれひ  
なし、是当組の定なり、若万一右のかんばんあるかたにおあて、こ  
の道中記の本所持の人へ売女のるいをす、めがましき事か、又鹿略  
の義有之候ハ、其宿の名前を御印被下、書面を以大坂まつや源助



方まで御しらせ被下候、早そく定宿さしかへ可申候、又浪花組仲間ニハ所持の鑑札有之候、夫を宿屋へ預けてとまる定なれば、組外人ハ鑑札なしに宿やへ行て当仲間連中などといふべからず、然れども此道中記所持のたび人へ女良などす、めまじとの相対なり、此義御心得あるべし、

これによれば浪花講加入の旅籠屋に、同講加入の旅人が宿泊すれば飯盛女を無理矢理勧められたり、僥略な扱いを受けることはないとしている。

前にも少し記したが、そこで問題になるのは旅籠屋側が旅人を組合員か否かを判断する方法である。口述によれば旅人が組合員であることを証明するのは道中記と鑑札で、旅人はこの鑑札を旅籠屋に渡し宿泊した。講加入者としては鑑札以外に道中記が貰えるというのは魅力であったろう。

天保一二年（一八四一）頃浪花講は一枚摺の『浪花講定宿附』（道中記集成39）を発行している。表は街道の模式図で裏面は浪花講定宿の一覧が掲げられている。定宿附の左下には「売弘書林」として江戸・京・大坂をはじめ計一八ヶ所の書林が記されている。このことからこの定宿附は講員向けというより、講員以外の旅人にも浪花講定宿を利用してもらうこと、そして講加入の勧誘が目的であったようだ。浪花講がいかに安心であるかを次のように宣伝している。

当宿宿之義は、一統宿引決而出し不申候、若途中ニ而定宿之名前を申上候手代杯紛敷人宿引ニ出候共、皆々偽りニ候間、決而□□取上ケ□□間敷候、又休泊之義ハ旅人御こ、ろまかせに遊バさるべく候、以上、

弘化から嘉永（一八四四～五四）の頃『諸国名所早引定宿図会』（道中記集成40）が出版されている。本書は松屋源助の自序があるが、巻末に

京都浪花講定宿

三条御幸町北へ入町  
松屋吉兵衛

とある。松屋吉兵衛の発行と考えてよいのかどうかは判断し難いが、松屋吉兵衛は浪花講の有力者であったようである。発行理由も不明だが浪花講の関係で出版されたものであろう。

本書は折本仕立、両面摺で絵図形式というよりは模式図である。収録街道は東海道・中山道をはじめ、松前・九州に及んでいるが、それは浪花講加入の旅籠を紹介するためである。

嘉永四年（一八五二）刊『大日本細見道中記』（道中記集成40）は浪花講・東国組・仲吉講・関東講が合同で出版したとみられる道中記で、板元は大坂の藤屋菊二郎、世話人諸国本屋中とあり、巻末には江戸・名古屋・京都・大坂の書林が列挙されており、一般向けに販売されたものようである。但し各宿場には講中指定とみられる旅籠名が刷られている。何故このような道中記が出版されたのかは不明だが、道中記購入者が講中に加入できたと誤解しないよう、次のような付記がある。

附記

道中ニ而宿引共何方へ御泊りニ候やと尋候時、鑑札等無之候而決而浪花講、亦ハ何々の講などと御こたへハ無用に候、宿ニよりてかへつてごたつき、面倒之義ま、有之候間、只定宿有之と斗り被仰、此名前之所へ御入来可被成候、

右之通り御心得置可被下候、以上、

これによれば講中加入の鑑札もないのに宿引に講中の名前を出すとして却って面倒なこともあるので、「定宿」があるとだけ答えるようにと注意している。

嘉永五年（一八五三）刊の『浪花講定宿帳』（道中記集成41）は新たに版を起こしたもので、その内容は見やすく整理されている。なおこの頃になると浪花講を騙る詐偽も横行するようになったようで、道中記巻末

に浪花講定書が掲載され注意を喚起している。

#### 浪花講定書

一当講内世話方など、申立、定宿附帳面へ名前加へ候入用金、又ハ新看板料、或ハ定宿付改板入用金、又ハ寄進事奉加など申立、金銭取集いたし候者、如何やうなる文面添書持参いたし候ハ、皆々いつハリ事二候間、決而御取上御無用之事、

一当講内一件二付、用事に御座候得は、大坂堺筋周防町まつ屋源助方まで、飛脚便り二書面を以而御申越下さるへく候、但し休泊之御客様方へ書状御ことづけ被成候義ハあしく候間、此儀御心得可被下候事、

一当講内一件二付、如何程入用金相懸り候とも、三都世話方にて不残持切候故、諸道中定宿并定休所へ老銭之儀も御助力御頼不申候間、此段急々御承知可被成候事、

右之通急々定宿并定休所へ申入置候、

右のような詐偽事件が起きるほど浪花講が発展していたということである。

浪花講に対し、後発の東講は講結成と同時に、安政二年（一八五五）に『東講商人鑑』（道中記集成41）を出版している。その叙には次のように記されている。

#### 叙

それ士農工商ハ、四民といひて其功ある、中にも商の商人ハ、むかし神代の御時に、蛭子の神の教へにて、世に売買交易の、道を弘むといひ伝ふ、これハ遙に往昔のこと、商ひ物の品をも知らねど、今昇平の君が代に、諸国いづれの辺鄙にも、米穀衣類万の調度、民家日用の品ハ勿論、唐阿蘭陀の葉まで、ゆき届く此が商人の、功にあらずして奚ぞや、しかるに諸国御城下ハ、いふに及ばず津々浦々、繁華の地に□軒を並べ、この商人の多かるも、何処にハ何の商ひ見

世、彼処に何の問屋ありと、予て知らバ外を尋ねず、入用のとき問にあひて、事を弁ずる便となり、また其道の人々が、商ひ手広になさんとするにも、是を知りなば取引の、弁利調法このうへなしと、己旅行を好むの序、その商人に譚らひて、家号及び暖簾の、印をさへに細にしるし、板に彫て一小冊とし、四方に知らしめむと欲するのミ、猶洩たるハ是より後、かの地遊歴の時にあたり、需に應じて家号姓名、委しく載て弘めんと云爾

安政二

乙卯季秋

甲 良山誌

（読点は原本のマ、）

右の叙から分るように、本書は一般の旅人を対象としたものではなく、かつたようである。このような商人鑑は既に文政一〇年（一八二七）『諸道中商人鑑』（道中記集成38）として出版されている。本書が対象とした街道は中山道と善光寺道であるが、予告には東海道と奥海道も刊行するとあるものの、刊行されなかったようである。本論から外れるが、シリーズものの多くが最初に出版するのは中山道で、次に東海道が出版されているようである。

『東講商人鑑』における街道の配列は奥州からはじまる。奥州は奥州之部・仙台領・会津領・羽州久保田領に分けられ、続いて越後・野州・下総・武州・中山道・甲州道中・東海道・大坂より四国・金比羅山道中、そして大坂より高野山・吉野をはじめ諸方への街道となっている。

いづれの街道も歩く道筋の案内はなく、東講商人定宿及び定休所そして各種商家の一覧であるが、奥州や越後については主要都市・有名社寺等の絵が掲げられている。これに対して東海道・中山道等関東以西は定宿や商家の一覧だけで、本書が関東以北に力を置いて編集されたものらしいことを察することができる。

なお巻末には講員であることを証明するために次のように記してい

る。

右東講商人鑑之儀は、(大)講中之外一切売買不致候、依之持主御名前相記シ置申候、以上、

講元

大城屋良助

持主

本書を持つことが組合員の証明になるが、『東商人鑑』を第三者に貸与することを防止するために所有者が記名するようになっていた。本人の名前を確認するためには往来手形の提示を求めたのであろう。

『東講商人鑑』は道中案内の役割を果たすものではなかった。そこで本書の付録として『五海道中細見独案内』上下二冊(道中記集成32)を配布している。各冊の巻末には次のように記されている。

右道中記之儀は、東講商人鑑ニ相添、一部ツ、差上申候、依之持主御名前左ニ相記申候、以上、

江戸湯嶋天神表門通り

柳横町

講元

大城屋良助

持主

これにも持主の名を記すようになっていた。

本道中記は五街道及び主要街道は模式図様に描かれ、小規模な街道は宿場名と定宿が列記されている。模式図様といっても建造物や風景も描かれ、絵図的雰囲気もあるものでそこに街道・旅・観光情報が書き込まれている。旅人は即座に必要な情報を得ることができるもので、道中記の白眉ともいえるものである。貝原益軒らの道中記は文章を読むものであったが、旅の大衆化と共に旅人達は一目瞭然、視覚に訴えるような道中記を求めるようになったのである。

『五海道中細見独案内』はその内容から好評を得たようで、安政五年に表題を『五海道中細見記』と改め、一冊本として出版された。これは一般旅人を対象として出版されたもので、巻末には「諸国発弘書林」と

して各地の書肆が列挙されている。当然「……持主御名前左ニ相記申候、以上、」の文言は記されていない。

『東講商人鑑』・『五海道中細見独案内』出版から四年後の安政六年、東講は『東講定宿帳』を出版している(筆者蔵)。『五海道中細見独案内』に較べると簡便なもので、若干街道の模式図は挿入されているものの、基本的には宿名と定宿を列記したものである。『五海道中細見独案内』を利用すればよいものを、新たに費用をかけて作ったわけである。その理由をここでは検討しないが、新たな道中記を出版した理由の一つに東講未加入者が何らかの方法で東講中と詐称して定宿を利用するようになったため、それを防止するためであったらしい。道中記には次のように記されている。

右のかんばんを目あてに所持のかん札を見せ候へば、帳面と引合せ、たとへば一人旅たり共心易く御止宿に相成可申候、尤わらじをぬがざるうちに帳面と引合可申候、若引合の帳めんこれなく候ハ、其やどにハ泊り申問敷候、かん板これあり候共、掛捨て定宿にハなりがたく候、右ハ御心得のため申上置候、以上、

安政六年

未四月

江戸湯嶋天神門前

柳横町

講元

大坂屋良助

発起人

私方ハはたごや仕不申候、尤江戸之儀ハ御勝手次第第二御泊り可被下候、右の文中に「所持のかん札を見せ」とあるように、『東講定宿帳』には縦九・三cm、横五・七cmほどの木製の鑑札が付いている。裏には東講の焼印が押され、裏面には次のように記されている。

持主 網干屋与左エ門

六百九

右は兼而御渡申置候附帳ニ引合之上、休泊其外無差支御取斗可被下候、

講元発起人

大城屋良助

右のうち番号と講員名は手彫り、そのほかは焼印である。

浪花講にしろ東講にしろ講員詐称対策に頭を悩ましたようである。その後も浪花講・東講共に詐称防止のための策を打ち出したり、道中記を出版したりしている。

浪花講・東講以外の講中もまた道中記の出版を行っていた。たとえば幕末には千嶋講が『千嶋講定宿附』（内題による）（『道中記集成42』）を、朝日講が道中記（表題不明）（『道中記集成42』）を、三都講なども道中記を出版していたようである。

幕末には多くの旅宿講が成立したとみられるが、講中が加入証明の手段の一つとして道中記を配付したため、道中記は広く普及したのである。

### ③ 鉄道沿線案内

#### （一）民間刊行の鉄道沿線案内

近代に至っても交通機関―特に鉄道―が発達するまでの移動手段は近世と大きく変わることはなかった。旅の時代であり、旅行案内書も道中記が主流であった。但し西欧からの印刷技術の導入により、銅版・活版印刷が大勢を占めるようになり、挿画も銅版画・石版画そして写真が利用され、造本も和装から洋装へと変わっていく。

近代に至ってからの道中記にも当然変化は見られるが、ここでは交通機関発達後の旅行案内書についての概観を中心とするので、このことについては別に発表したい。

旅行案内書に大きな変化をもたらしたのは鉄道、それも東海道線の開

通であった。明治二二年東海道線が開通すると東海道線をはじめとする鉄道沿線案内が出版されるようになった。旅程に関する案内は道中記から鉄道沿線案内へと転換したわけである。

本格的な鉄道沿線案内が最初に出版されたのがいつであるかは定かではないが、明治二七年頃から多数出版されるようになっていく。次にその主なものを掲げておこう。

明治27年6月23日 林莊太郎編・発行『全国鉄道賃金名所旧跡案内』

金川書店

明治27年7月27日 亀一山著『東海道鉄道名所案内』駁々堂

明治27年12月9日 桜井純一著・発行『東海道鉄道遊賞旅行案内』売

捌所丸善

明治29年7月27日 大橋又太郎編『旅行案内』日用百科全書一四 博

文館

明治31年1月1日 伊藤芳五郎編『日本鉄道旅行名所案内』一二三館

明治32年5月25日 松岡広之編・発行『日本鉄道案内記』

明治32年6月22日 宇田川文海編述『南海鉄道案内』南海鉄道

明治32年8月1日 春日利兵衛編・発行『官設鉄道案内』発行所服部

書店

明治34年7月3日 西野恵之助編・発行『山陽鉄道案内』

明治35年3月17日 津田南寿著『全国漫遊最新名勝案内』松栄堂書店

明治35年9月18日 桜井純一編『日本鉄道線路案内記』博文館

明治36年6月22日 野崎城雄・洲崎栄芳共著『日本漫遊の栞』発行者

西村寅次郎外

明治36年8月5日 東輝文編『古今東海鉄道名所記』発行所岡島書店

明治36年9月11日 坪谷善四郎著『日本漫遊案内』上・東半部 博文

館

明治38年4月9日 坪谷善四郎著『日本漫遊案内』下・西半部 博文



館

明治39年8月6日 田山録弥著『日本新漫遊案内』発行服部書店・売捌

所大倉書店

明治40年7月27日 田山録弥・小杉国太郎他著『東海旅行図会』修文

館

明治42年6月28日 神谷市郎著『東海車窓の名勝観』博文館

明治44年6月5日 森永規六著『西武鉄道管理局線名所図会』発行浜田日報社他・

発売 田中書房

ここには国鉄―国鉄という表現は適切でないが、作業局・鉄道院・鉄道省と区別して記すと煩雑になるので、国鉄と表示することにする―の旅行案内Ⅱ鉄道沿線案内は掲げていないが、鉄道沿線案内は民間が先行した。国鉄の沿線案内については次節で述べる。

右に掲げた沿線案内は明治期に出版された内の何割程度に相当するのかは分らないが、当時の出版状況からみて主要なものは掲げていると思う。本格的な沿線案内が盛んに出版されるようになったのは、明治二十七年頃からのようである。

民間出版といっても執筆者の中には鉄道関係者もいた。―厳密に言うなら私鉄関係者は民間人ということになるが―二冊の沿線案内を著した桜井純一は『東海道鉄道遊覧旅行案内』の「本書発行事由附言」によると、「又余は職ニ日本鉄道株式会社ニ従フモノナルヲ以テ」とあるように日本鉄道株式会社社員であった。さらに附言によれば桜井は明治二五年友人某と全国の鉄道案内を計画し、とりあえず友人は日本鉄道、桜井は東海道を分担するも、友人は激務のため執筆できず、東海道を先に出版することになってしまった。日本鉄道社員としては東海道を先に出版することに抵抗があったようだが、日本鉄道については他日を期したいと書いている。本書には鉄道局長松本荘一が題字を、日本鉄道社長の小野義真が序文を寄せている。そして桜井が他日を期して出版したものが

『日本鉄道案内記』であるが、上司らの序文等はない。

『日本鉄道案内記』の編者松岡弘之も日本鉄道社員で、序文に「今春偶々我社に於て案内記発行の議あり、」とあるが、会社の業務として出版したものではなく、同好の士によって編集出版されたものであった。

『西武鉄道管理局線名所図会』の森永規六も西部鉄道管理局職員で、管理局長谷川謹介以下課長・係長らの題字・序文が寄せられている。

沿線案内に限らず、鉄道関係者が旅行案内書を執筆し上司が題字や序文を寄せるというのは、昭和一〇年前後まで行われていたようである。

近世の道中記は大衆化とともに内容が簡便になっていったが、明治期に出版された沿線案内はそのほとんどが詳細な内容である。

『全国鉄道賃金名所旧跡案内』は縦二一、七cm、横一四、五cm。案内書としては大判で本文四九四頁の大冊である。収録路線は東海道・山陽道・讃岐鉄道・伊予鉄道・九州鉄道・阪堺鉄道・大阪鉄道・関西鉄道・敦賀線・甲武鉄道・日本鉄道・両毛鉄道・直江津線そして東京・京都・大阪の案内で、沿線各駅毎に名所・観光案内が記されている。

『官設鉄道案内』は本文二五九頁、賃金表五一頁だが、本文の後半は鉄道略則・鉄道貨物運送補足・乗客の注意すべき事項・荷物托送手続き及賃金・官設鉄道概況が延々と続く。

固い書名が続くが、「漫遊」というように一般に馴染みやすい名称もつけられるようになり、『漫遊の葉』などは活版和装本で表紙は版画、口絵には写真が数多く用いられている。

『東海車窓の名勝観』は沿線の眺望をこと細かに記したもののだが、新橋停車場出発の辺りを少し引用しておこう。

浜離宮と芝離宮 汽車の動き初むるや、間もなく線路の下を横ぎれる道路あり、此にて左窓を見れば、一町許を隔て、堀を挟みて前面に、樹木の鬱蒼として見ゆるは浜離宮にして……

『東海旅行図会』はその名のごとく東海道の絵図で、絵を小杉放庵が、

文章を田山花袋・小栗風葉・沼浪瓊音が書いています。<sup>〔西部鉄道名所図会〕</sup>

は『<sup>〔東海〕</sup>道線旅行図会』に触発されて作られたもので、その内容形式は全て

『<sup>〔東海〕</sup>道線旅行図会』を真似たものである。

近世の道中記は大衆化と共に内容が簡略になっていったが、鉄道の時代になると再びハードというか詳細な内容になってしまっている。それは旅行案内書に限らず多くの事象は草創期、導入期には特定階級に位置するものが享受し、時を経て大衆化するにつれ、製作者側は大衆の要求に応えるため安価なもの、簡略化されたものを製作していくようになる。

近世を通じて道中記という旅行案内書は出版され続けてきたが、鉄道の導入により旅行案内書、特に旅程に関する案内書は仕切り直しになったわけである。鉄道旅行の草創期、沿線案内書も又草創の時期であったということである。そのため草創期の沿線案内の著者たちも旅客が何を求めているのかをつかみ切れていないため、一方通行であり、詳細な内容、百科全書的内容になってしまったのであり、先に列挙したような沿線案内は特定な階層が求めたのである。

沿線案内のほとんどは判型もハンディなものではあるが、その内容からみて旅行に携行するというより旅行に出る前に読む、あるいは読んで知識を得るためのものであった。このような沿線案内を入手するような階層は多くの知識を欲したのであり、沿線案内は読みやすい地誌書であった。

近世前期あるいは一七〇〇年代頃までの道中記及び道中記の著者はステータスがあったように見受けられるが、沿線案内および一定の内容を持つ旅行案内書もまた使い捨てではなく、書架に納めるべきものであった。それを示すように当時の購入者が麗々しく蔵書印を押印したものを随分と見かけるのである。

『日本名勝地誌』<sup>〔25〕</sup>の編纂に従事した田山花袋もまた案内書『日本新漫遊案内』を執筆している。当時小説家が旅行の案内書を執筆することが

文学界でどのように受け取られていたのかはよく分からないが、少なくとも小説家の立場を脅かすようであれば、花袋も案内書の執筆はしなかったであろう。このほかにも花袋は多くの旅行案内書を執筆しているが、小説家である花袋は紀行文形式を取っており、筆者が旅行案内書としたものを、文学の分野では紀行文としているものも多い。

明治二〇年代後半以降沿線案内はかなり出版されたようであるが、大正期にはいるとその数は激減しているようである。

大正3年4月15日―5年8月8日 田山花袋著『日本一周』全3冊

博文館

大正7年6月15日―8年6月17日 谷口梨花著『汽車の窓から』全2

冊 博文館

大正9年7月15日 全国名所案内社編『<sup>〔日本〕</sup>巡遊汽車の旅』岡村書店

大正10年6月15日 鉄道旅行案内編纂所編『<sup>〔大正〕</sup>十年版鉄道旅行案内』白

羊社

大正10年12月 清水吉康著『東海道パノラマ地図』金尾文淵堂

大正11年1月28日 全国鉄道旅行案内所著『全国鉄道旅行案内』駸々

堂書店旅行案内部

大正12年7月15日 安治博道他著『<sup>〔新〕</sup>鉄道旅行案内』駸々堂旅行案内

部

右に掲げた沿線案内は筆者の架蔵にかかるものであるから、これをもって激減したと断定することは危険であるが、筆者が収集した大正期の旅行案内は一二〇冊から一三〇冊である。収集当時ここで述べているような発想はなくどちらかといえば沿線案内を求めている、この結果である。

右のうち田山花袋・谷口梨花の著作は気軽に読ませようというものであり、特に花袋の『日本一周』は花袋の旅の記録・紀行文によっており、『日本一周』という紀行文集と見ることもできる。しかし東海道線のうち書

きたいところだけを書いたのではなく、東海道全線について記している。前にも記したが筆者は文学作品としての紀行文がどのようなものかは分らないが、それなりの起承転結のようなものがあって然るべきなのだろう。『日本一周』は紀行文という体裁の沿線案内とみるべきである。

一方大正一二年の『<sup>新</sup>鉄道旅行案内』は横長の本で本文一二九頁、厚さが四cmもあり、弾丸でも入れるような頑丈な紙製の箱に入っている。本書は旅行業者や旅館等、旅行施設に備えられたものであろう。

本稿では特に取り上げなかったが、折本仕様等の簡便な鉄道路線図、も多数出版されており、多くの旅行者はこれを求めたと思うが、『東海道パノラマ地図』は模式的な絵図ではなく、詳細に描かれた多色刷りの鳥瞰図である。山陽線・近畿・東京付近の沿線パノラマ地図も発行され、東海道については昭和三年に縮刷版が発行されている。鉄道沿線絵図としては最も優れたものであるが、これ以降このような鳥瞰図は作られていない。

沿線案内が激減した背景には旅行内容の変化があったからである。それは旅行の多様化であり、近世の徒歩による移動が鉄道による移動になり、旅行から道中が消滅してしまったからでもあった。

## (二) 国鉄発行の鉄道旅行案内

沿線案内は民間が先行したが、次に国鉄の沿線案内についてみてみよう。

次に掲げた国鉄の沿線案内も筆者の架蔵のものであるが、明治から戦前にかけて国鉄が編集出版したものはある程度揃っているものと思われる。

明治36年4月30日 鉄道作業局運輸部編・発行『<sup>鉄道</sup>沿線路名所案内』  
明治38年8月18日 鉄道作業局運輸部編・発行『<sup>鉄道</sup>沿線路名所案内』  
明治39年5月3日 鉄道作業局運輸部編・発行『GUIDE TO THE IM-

## PERIAL GOVERNMENT RAILWAYS OF JAPAN』

明治42年6月 鉄道院編・発行『鉄道院線沿道遊覧地案内』  
明治42年11月 東武鉄道管理局営業課編・発行『遊覧地案内』  
明治43年6月26日 鉄道院編・発行『<sup>鉄道</sup>沿線遊覧地案内』  
明治44年6月27日 鉄道院編・発行『<sup>鉄道</sup>沿線遊覧地案内』  
明治45年7月4日 鉄道院編・発行『遊覧地案内』  
大正元年10月29日 東部鉄道管理局営業課編・発行『<sup>鉄道</sup>沿線案内』  
大正2年7月 鉄道院編・発行『<sup>鉄道</sup>沿線遊覧地案内』  
大正3年6月23日 鉄道院編・発行『<sup>鉄道</sup>旅行案内』博文館  
大正4年6月28日 鉄道院編・発行『<sup>鉄道</sup>旅行案内』博文館  
大正5年7月15日 鉄道院編・発行『<sup>鉄道</sup>旅行案内』博文館  
大正6年6月15日 鉄道院編・発行『<sup>鉄道</sup>旅行案内』博文館  
大正7年5月30日 鉄道院編・発行『<sup>鉄道</sup>旅行案内』博文館  
大正10年10月5日 鉄道省編『<sup>鉄道</sup>旅行案内』博文館  
大正13年10月8日 鉄道省編『<sup>鉄道</sup>旅行案内』博文館  
昭和4年7月28日—11年3月30日 鉄道省編『日本案内記』全八冊博文館

昭和5年3月31日 鉄道省編『<sup>鉄道</sup>旅行案内』  
昭和11年3月31日 鉄道省編『<sup>鉄道</sup>旅行案内』  
国鉄出版のもので最も古いものは明治三十六年の『<sup>鉄道</sup>沿線路名所案内』であるが、本書はサブタイトルに「一名博覧会出品大写真説明」とあるように、明治三十六年三月一日から七月三十一日にかけての大阪の天王寺で開催された第五回内国勸業博覧会に出品した沿線写真とその解説である。

本格的な案内書は明治三十六年出版の『<sup>鉄道</sup>沿線路名所案内』で、<sup>(26)</sup> 鉄道案内所において販売した。しかし本文六〇〇頁、縦二二、六cm・横一五、四cmの大判で紙質の関係で重量もあるため、交通・旅行業関係者

及び旅宿業者が主に購入したものであろう。翌三九年には英文の案内も出版されている。

明治四二年に『鉄道院線沿道遊覧地案内』が出版されると、大正二年まで遊覧地シリーズが続き、四二年には地域版の案内ともいえるべき『遊覧地案内』が東部鉄道管理局営業課により編集出版されている。

大正三年からは書名を『鉄道旅行案内』と改称し、ほぼ同一判型で大正七年頃まで毎年出版されている。ここではそれぞれの内容を検討する余裕は無いが、年毎に内容を改定しているようである。いずれも判型は新書版程で、三〇〇頁程から四〇〇頁余である。

大正七年版は翌八年にもそのまゝの内容で出版され、このシリーズは終わったようである。民間出版の『大正十年版鉄道旅行案内』は鉄道院が大正九・十年と『鉄道旅行案内』を出版しなかったことから同年六月出版したもので、その序文に次のようにある。

例年鉄道省から「鉄道旅行案内」が出るが、昨年及今年は出なかった。それに乗じたといふ訳ではないが、大分以前から従来の鉄道旅行案内よりもっと最新調査のを掲げたいと用意してゐた。其結果此鉄道旅行案内を公刊することになりました。

さらに本書編集には鉄道省関係者、各駅主任、及び谷口梨花・小柴卯之七らの協力があったことを記している。

大正一〇年一〇月鉄道省の『鉄道旅行案内』は横長の本に姿を変えて登場した。大正一〇年は鉄道開設五〇周年にあたるため、これを記念して新装版『鉄道旅行案内』が出版されたわけである。本書は吉田初三郎の絵や図などが一〇七点も収録され人気を博した。大正一三年の『鉄道旅行案内』は大正一〇年の改訂版で、再び吉田初三郎が起用されている。<sup>27)</sup>

横長の旅行案内は二冊で終るが、大正一二年に駿々堂旅行部が発行した『新鉄道旅行案内』は大正一〇年の『鉄道旅行案内』を模したもので

あろう。

次に新たな旅行案内が出版されたのは昭和四年からの『日本案内記』である。『日本案内記』は旅行案内書の決定版・名著ともいえるべきものであり、本書については中川浩一<sup>28)</sup>が詳しく述べているので、ここではその概略のみ記しておこう。

大正一五年（昭和元年）鉄道省は国内向けの詳細な旅行案内書―『日本案内記』―の刊行に着手した。第一冊目として「東北篇」を昭和二年に出版すべく編集を開始したが、実際には四年七月に刊行された。以下昭和五年「関東篇」、六年「中部篇」、七年「近畿篇上」、八年「近畿篇下」、九年「中国・四国篇」、十年「九州篇」、一一年「北海道篇」が刊行され完結している。その後昭和一二年から改正版が出版され、戦後も昭和二四年から改正版が日本交通公社から刊行されている。

『日本案内記』は全八冊であるが、昭和五年と一一年に『鉄道旅行案内』が出版されている。以上のことから分るように、広範にわたる国鉄の沿線案内は事実上『日本案内記』をもって終焉を迎えたのである。

## おわりに

旅行案内書を本稿では試験的に四分類したが、ここではそのうちの①旅程に関する案内―道中記・鉄道沿線案内―について述べてきた。

徒歩による移動Ⅱ旅の時代にあつては目的地までの旅程の概要を知っておく必要があつたし、移動の場である道中は名所旧跡等を楽しむ場であり、道中記はその役割を果たすものであつた。

近世前期の道中記はおそらく価格も高く、これを所持できる旅人は極めて限られた階層の人々であつたろうし、識字率の面からもまた所持できる旅人は限定されざるを得なかつた。一七〇〇年代後半に入ると道中記も各種出版されるようになるが、その背景は経済的余裕、旅人の増加、



そして識字率の向上である。

道中記が一気に普及するのは浪花講・東講をはじめとする旅宿組合の成立である。それと同時に内容等が整理されて読みやすくなり、視覚に訴えるものが作られ、簡略化されたものも出版されている。

ここでは携帯できる木版摺りの道中記を取り上げたが、旅人が旅中に書いた旅日記もまた道中記の役割を果たした。旅日記の中には明らかに子孫が旅に出るときのために書き残した旅日記がかなり残されている。

近代に入っても交通機関が発達するまでは旅の時代であり、旅程に関する案内は道中記であった。

明治二二年東海道線が開通すると、道中の案内は不要となり、鉄道沿線案内が刊行されるようになった。しかし鉄道に乗れば道に迷うこともないわけであるから、旅程に関する案内は不要になっていった。

鉄道沿線案内の刊行は民間が先行し、明治二〇年代後半から各種沿線案内が出版されるようになるが、大正期に入ると激減していくようである。

鉄道沿線案内の減少は旅行の多様化によるもので、地域別・テーマ別の案内書が出版されるようになったからである。『漫遊案内七日の旅』・『郊外探勝その日帰り』・『近畿遊覧その日かへり』・『泊旅行土曜から日曜』<sup>(32)</sup>というような旅行指南書・温泉案内・名所史跡案内・海水浴案内・登山案内等々の案内が陸續と出版されるようになった。

沿線に関する案内書は旅行関係者にとっては必要なものであろうが、一般旅行者のにとっては必要なものではなかった。旅の時代と異なり沿線の観光案内があってもいちいち下車するわけにも行かないし、よほどのマニアでもない限り鉄道沿線案内を手には、車窓の風景を眺め続ける旅行者はいないだろう。行楽目的の旅行者は車中で飲食を楽しみ、そしてまどろみ、車窓の移りゆく風景を眺めるといったところだろう。旅行からは道中が欠落してしまったのである。

国鉄が本格的な沿線案内を刊行したのは明治三八年のことであるが、四二年以降大正末に至るまでほぼ毎年刊行されており、昭和四年からはその到達点ともいうべき『日本案内記』の刊行が開始されたが、『日本案内記』完結以降新たな鉄道沿線案内が編纂されることはなかった。

国鉄としては旅客の増加は最大の使命であり、そのためにも鉄道沿線案内を出版し続けなければならなかったであろうし、格調の高い鉄道沿線案内の刊行は国鉄のプライドでもあったろう。民間における鉄道沿線案内刊行の減少については先に述べたが、国鉄が常に格調の高い鉄道沿線案内を刊行し続けてきたため、民間の出版社が同じようなものを出す必要がなかったことを付け加えておく必要があるだろう。

国鉄も鉄道沿線案内の刊行を続ける一方、旅客のニーズに合わせた案内書も当然出版している。明治四二年東部鉄道管理局営業課編『遊覧地案内』・大正八年『神詣で』・同九年『温泉案内』・同十一年『お寺まわり』・同十三年『羽越線案内』・同年『干和田・田沢・男鹿半島案内』・同十四年『豆相温泉めぐり』というように地域別、テーマ別の案内書を出版、版を重ねている。

昭和に入ると鉄道省、各鉄道局が地域を中心とした案内書を出版しているが、その一部を列挙しておこう。

昭和八年『景観を尋ねて』・昭和九年四月『房総と水郷』・同年同月『近畿中国四国名勝案内』・昭和九年一〇月『東京中心釣案内』・昭和九年一月『伊豆半島めぐり』・昭和一〇年二月『紀州』・昭和一二三年三月『四国』・昭和一二四年四月『登山案内』・昭和一三年一月『東北の玩具』・昭和一三年三月『北陸』・昭和一四年一〇月『近畿山陰の風物』

近世の旅は伊勢神宮・善光寺参詣あるいは都市周辺の寺社へ旅するなど、目的地はあったが何度も繰り返すように道中をも含んだ「旅」そのものが目的であった。道中で史跡名所・寺社を見物参詣し、時には温泉にも入った。道中があることにより多様な楽しみを味わい経験すること

ができたが、交通機関が発達すると多様な楽しみをすることが不可能になってしまった。

近代に至り鉄道・バス輸送が発達すると、より遠くへの旅行が可能になり、都市近郊には新たな観光地が多数成立した。鉄道開通後も伊勢参宮は旅行の頂点に立つものであり、象徴でもあった。伊勢参宮が旅行の象徴であることは大正期あるいは戦前まで変わることはなかっただろう。

鉄道発達以降伊勢参宮者は増加したであろうが、旅行人口に占める伊勢参宮者の割合は近世に比較して爆発的に増加したとは思えないのである。都市周辺に多くの手軽な観光地が成立したことにより、安価に旅行ができるようになった。これによりようやく旅行の気分を味わえる階層が増加したとみられるからである。又長距離旅行にしても多くは団体旅行であり、鉄道沿線案内を必要とすることはなかったのである。

本稿では取り上げなかったが、旅行は教育という立場からの鉄道沿線案内も出版されている。

本格的な鉄道沿線案内がいつ頃まで出版されていたのかは定かではないが、ここでは最後に昭和三十五年修道社から刊行された『旅愁東海道線』を紹介しておこう。本書は東京教育大学の和歌森太郎と一橋大学の石田龍次郎が編者となり、水江漣子・中丸和伯・藤岡謙二郎をはじめとする歴史学者・地理学者等が執筆したものである。研究者が執筆しているとはいえ読みやすく、内容も充実しており、昭和三〇年代の東海道沿線の名所・旧跡・地場産業をみる上で、現在となつては貴重な地誌書である。

鉄道沿線案内は旅行案内書としてだけでなく、簡便なそして線状ではあるが広範な地域の地誌書でもあった。

註

- (1) 新城常三著『社寺参詣の社会経済的研究』(昭39) 塙書房
- (2) 拙稿「旅日記にみる近世の旅について」『交通史研究』13 (昭60)
- (3) 今井金吾監修『道中記集成』(平8) 10 大空社
- (4) 三田村鳶魚著『三田村鳶魚全集』一五 (昭51) 中央公論社
- (5) 大島延次郎著『日本交通史論叢』続編 (昭32) 吉川弘文館
- (6) 『旅風俗』Ⅱ (講座日本風俗史別巻5) (昭34)
- (7) 註(2)の別巻の三。七三頁〜一七一頁。このほか二〇三頁〜二一五頁は「明治の道中記」
- (8) 中川浩一著『旅の文化誌』(昭54) 伝説と現代社
- (9) 岩佐淳一著「旅行とメディア―戦前期旅行ガイドブックのまなざし」(学習院女子大学紀要) 3 所収
- (10) ジャパン・ツーリスト・ビューロー編『旅程と費用概算』(昭9) 博文館 本文七三八頁、付録三一頁
- (11) 忠田敏夫著『参勤交代道中記―加賀藩史料を読む』(平5) 平凡社
- (12) 註(10)に同じ
- (13) 『耽奇漫録』下(『日本随筆大成』第一期別巻) (平6) 吉川弘文館五六七頁
- (14) 浅井了意著朝倉治彦校注『東海道名所記』二 (昭54) 平凡社二九三頁〜二九四頁
- (15) 註(14)『東海道名所記』一 (昭54) 一二三頁〜一二四頁
- (16) 板坂耀子・宗政五十緒校注『東路記・己巳紀行・西遊記』(『新日本古典文学大系』98) (平3) 岩波書店 板坂は「貝原益軒『東路記』『己巳紀行』と江戸前期の紀行文学」題した解説を執筆している。
- (17) 柳田國男校訂『紀行文集』(『帝国文庫』22) (昭5) 博文館
- (18) 註(15) 四二二頁
- (19) 安田相郎著『大和巡遊記』(『日本庶民生活史料集成』2) (昭44) 三一書房 同右解説
- (20) 大田区立郷土博物館編発行『特別展弥次さん喜多さん旅をする』(平9年)
- (21) 『東海道中勝景行程記』(平12) 大平書屋 本書は原標題を改変している。
- (22) 大島延次郎著『日本交通論叢』所収「旅宿として観たる講の発達」本書は昭和一四年に出版され、同四四年法政大学出版局より復刻された。ここでは復刻本に依った。
- (24) 『道中記集成』三九の解説
- (25) 『日本名勝地誌』全12編 (明26) 34 博文館 このうち1〜8・10編は野崎左

文著。9編松原岩五郎著。11編琉球の部田山花袋著。12編台湾嶋田定友著。田山花袋は『日本名勝地誌』の簡略版『新撰名勝地誌』全10巻（明43〜大3）博文館を編集している。

- (26) 日本国有鉄道編『日本国有鉄道百年史年表』（昭47）明治8年8月17日の項
- (27) 長瀬昭之助著「吉田初三郎雑考Ⅰ」（『古地図研究』307所収）
- (28) 註（7）に同じ
- (29) 落合昌太郎著『漫遊案内七日の旅』（大4）有文堂
- (30) 落合昌太郎著『郊外探勝その日がへり』（大5）金尾文淵堂
- (31) 彩霞生著『近畿遊覧其日かへり』（大6）文徳堂・小谷本店
- (32) 松川二郎著『一泊旅行土曜から日曜』（大9）東文堂

（国立歴史民俗博物館研究部）

（二〇〇九年五月八日受付、二〇〇九年九月二五日審査終了）

## Formation and Development of Travel Guidebooks

YAMAMOTO Mitsumasa

While the study of the history of travel is diversified, that of travel guidebooks has stagnated, despite the existence of basic historical materials. This article classifies travel guidebooks and describes their formation and transformation. This article defines the transfer on foot in the early modern period, midway through the Meiji Period as walking, the transfer via transportation in the same period as traveling, and both of them together as traveling.

Travel guidebooks may be classified in terms of (1) the guide of the itinerary, (2) the local guide, (3) the guide by subject, and (4) the pinpoint guide. This article deals with the travel guidebooks of (1). The guide of the itinerary provides information on Kaido (highways) and railway lines, and the early modern guidebooks of this type were called Dochuki travel diaries.

In Japan, Dochuki travel diaries were first published around the Meireki Period, and their form had been established and fixed by the Enpo Period. Various Dochuki travel diaries were published in the 1700s, including those with illustrations alone. However, they seem unlikely to have become widespread, due to the low literacy rate and high prices. Dochuki travel diaries became popular after being published by lodging associations such as the Naniwa-ko group, etc.

When the Tokaido Line was inaugurated in Meiji 22 in the modern period, the Dochuki travel diaries disappeared. Private publishers started publishing railway guidebooks in the late Meiji 20s, although they decreased dramatically in the Taisho Period.

Japanese National Railways published a railway guidebook in Meiji 38, which they continued to release almost every year since Meiji 42 until the end of the Taisho Period. It published a total of eight classic “Japan Guide” books since Showa 4.

The railway guidebooks by private companies decreased in the Taisho Period because of diversification. During the early modern period, people traveled to visit shrines and temples such as pilgrimages to Ise Shrine, but the travel itself was also part of the enjoyment, including the actual journey. In the modern period, however, this process has disappeared, and traveling has simply become a transfer from one point to another. The aim of traveling became diversified following the development of railways and buses, and a number of guidebooks by region or subject were published. With this background in mind, guidebooks on itinerary disappeared.

Key words: guidebook of Tokugawa government, guidebook along on a railway line, walking tour, railway, naniwa-ko group

---